

小さな思いやりを大切に

県立村上中等教育学校 3年 加藤 萌

三月十一日に発生した東日本大震災。被災地には、全国から物資や義援金、ボランティアがたくさん集まりました。それらの支援に涙を流して感謝する人もいました。私は、そういったニュースを見て、日本人の助け合いの精神を強く感じました。しかし、大きな災害や事件がなければ、他人の思いやりを感じることはできないのでしょうか。今、日本で一番大切なものは何でしょうか。そう考えたとき、私が真っ先に思い浮かべたのは、「思いやり」という言葉でした。

私が思いやりで心が温かくなった小さな出来事があります。それは、家族旅行でドイツに行った時のことです。私たちは、山に登ろうと頂上まで行くロープウェイに乗りました。そこは観光地だったためか、そのロープウェイは超満員で、立つのがやっとでした。そのような時、まだ幼かった弟に、一人の男性が席を譲ってくれました。そして、外の景色が見えるようにと弟を抱き上げてくれました。その行動があまりにスマートで、私は感動しました。その男性はお礼を求めるわけでもなく、「当たり前ですよ」といった感じでにこにこ笑っていました。私は、心を動かされました。また、「日本ではあまり見ない光景だな」と思いました。確かに、皆が見ている前で「この席をどうぞ」や「大丈夫ですか」といった声掛けをするのは恥ずかしいし、「余計なお世話かな」と戸惑ってしまいます。しかし、自分の少しの気遣いで、周りの雰囲気を変えることができます。ドイツでのあの男性のように、空気をパッと明るくすることができるのです。

ある日の朝日新聞の「声」という読者投稿の記事を読んで考えさせられました。電車内での出来事です。電車内に、高校生くらいの少年と中年女性が乗っていました。電車がガタンと揺れた拍子に、女性がよろけて少年にぶつかりま

した。少年はすぐに「ごめんなさい」と謝りましたが、女性はふてくされた表情でさっさと行ってしまったといいます。私はこれを読んで、腹が立つというよりも悲しくなっていました。また、記事にはこうも書かれていました。「今、『最近の若い人たちは非常識だ』と言われるが、それは大人たちにも言えることだと思う。」と。若い人が皆、非常識とは限りません。そして、大人であれば誰でも、人を思いやることができるとは限りません。世界中のあらゆる世代の人たちが「他人を思いやる心」を今考え直す必要があるのではないのでしょうか。

私は、この二つの出来事から、小さな思いやりでも人を幸せにするということ学びました。そしてそれと同時に、少しの身勝手さが人の心を悲しませることがあると気付きました。この「小さな思いやり」は具体的に行動に現すことが出来るのではないのでしょうか。例えば、学校の廊下で誰かと肩がぶつかってしまったら、互いに謝りの言葉を掛け合う。教室に、持ち主不明の消しゴムや、紙くずが落ちているのを見つけたら、周りの人に呼び掛けてみる。知らないふり、気付かないふりをして通り過ぎるのは最も簡単で、自分にとって一番楽な方法かもしれませんが、そのままではきっと、私たちの学校も寂しい場所になってしまうことでしょう。私たちが少し立ち止まって相手を思いやれば、それだけで学校も家も普段通る道も、今よりもいっそう楽しい心穏やかな場所になるのではないのでしょうか。私はその小さな一歩を大切にしていきたいです。

大きな思いやりの陰に、目立たないけれども小さな心遣いや思いやりを日々積み重ねていくことが、日本の元気をきつと取り戻してくれるのではないかと、私は考えます。